
ペルソナ3-if—

ロク

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ペルソナ3ーi fー

【Nコード】

N8071N

【作者名】

ロク

【あらすじ】

人は誰しも心に仮面、つまりペルソナを備えている。他者と向き合うときに付ける仮面、自分自身を保つために付ける仮面、その数は人によって異なる。仮面が多い人間もいれば、少ない人間もいる。ただ、その仮面の下には、誰しも唯一無二の自分がただ一人だけ存在している。

第一夜『プロローグ』（前書き）

この小説はペルソナ3を元にした二次創作です。

第一夜『プロローグ』

人は誰しも心に仮面、つまりペルソナを備えている。他者と向き合うときに付ける仮面、自分自身を保つために付ける仮面、その数は人によって異なる。仮面が多い人間もいれば、少ない人間もいる。ただ、その仮面の下には、誰しも唯一無二の自分がただ一人だけ存在している。

「助けてくれえ！」

闇夜の路地裏に響く男の叫び声。男は正体不明謎の『影』に追われている。必死に走る男だが、影との差はだんだんと縮まっていく。影の速度が上がっているわけでは無いが、男の方に疲れが出て来たのだろう。

「はあはあ……！ た、助け、誰か助けてくれ！」

「グギイイヤアアア！！」

影の不気味な鳴き声と共に、男が影へと飲み込まれてしまった。そして男は、二度と人として生きることとはなかった。

「ねー、私最近物騒な噂聞くんだよねえ」

月光館学園の制服を着た女子生徒が友達と噂話に花を咲かせている。

「なにになに？」

「夜遅く出歩いてるとねー、出るんだってえ……幽霊が！」

立ち聞きする趣味は無いが、聞こえて来てしまったのはしょうがない。だが何とも幼稚な内容だろうか。物騒な噂と云うくらいだから、さぞやおぞましい内容なのかと思えば『幽霊が出る』などと云う内容では、あまりに拍子抜けと云う奴だ。

「よっ、おはよ♪」

とか考えていると、いきなり同じクラスの『伊織順平』に声を掛けられた。そこまで親しくなった訳では無いが、別段嫌な奴でも無いので、適当に挨拶を返す。

「おいおい、相変わらずクールだなあ」

普通に挨拶をしただけなのに、伊織はそう言ってきた。確かに俺は口下手で、誰に対しても長く会話をした事が無い。だが決してクールを決め込んでいる訳では無い。

「あまり茶化さないでくれよ」

「わりいわりい♪ んで、こっちの生活にはもう慣れたか？」

何故伊織がそんな心配をするのかと言えば、先週俺はこの巖戸台に

越してきたばかりだからだったりする。

「まだ一週間も経ってないから、何とも言えない……」

「とか言っても、俺らの学年でお前の事知らない奴は誰も居ないからさ、すぐに溶け込めるかもな!」

話は越して来た日にさかのぼる。俺が巖戸台へ来た日、俺は早速学園へと挨拶に来ていた。

「じゃあ、あなたが転入してくる……えーっと」

「如月英二です」

「あーそうそう、如月くんね。私は国語主任で、あなたの担任になる鳥海よ、よろしく」

感じの良い先生で内心ホッとした。ただ少しさばさばし過ぎてる印象も受ける。

「じゃあ、早速明日から登校して貰うから、また明日職員室に来てね」

最後は、もう面倒臭いと言わんばかりの適当ぶりで帰らされた。でも俺としてみればその対応は少しうれしい。長話を延々と聞かされるよりはずっと。

「きゃっ!」

下駄箱付近まで来た時、大きな荷物を両手いっぱい抱える女子生徒がバランスを崩したのを見掛けてしまった。

――ボンッ

「大丈夫、か？」

反射的に助けに動いた俺は、結果的に女子生徒を抱き抱える形になっていた。

「えっ、あ、あり、がと……」

女子生徒は目を丸くして驚いている。それはそうだろう、いきなり見知らぬ男に抱き抱えられれば、誰でもこんな感じになるだろう。

「誰？」

「どさくさに紛れて岳羽に触ってるよ」

そして、どこからともなくやって来た他の生徒達が何かを言っている。

「い、ごめんなさい……！」

女子生徒は我に返ったようで、慌てて俺から身を離れた。とその拍子に持っていた荷物が廊下に散乱した。どうやら彼女は弓道部員らしく、散乱した荷物の中に弓が紛れていた。

「はぁ……あれがまさか、岳羽だったとは思わなくてさ」

「あっはははは♪ でもお前もラッキーだよな、何たって人気NO. 1のゆかりっちを抱いたんだからさ♪」

「あのさ、誤解される言い方は止してくれ……」

あれは単なる不可抗力で、別にラッキーだったと思ってなんかいい。それに、あの一件で俺はすっかり時の人となった。『岳羽ゆかりのナイト』などと呼ばれたりもした。

「おはよ」

そんな中、噂をすればなんとやらで、俺達の元へと岳羽が来た。

「おはようさん♪ ちょうど今、あの時の話をしてたんだよ〜ん！」

「あの時って……あんたまだそんな事言ってるの？」

次の日、岳羽が同じクラスだった事もあり、なんとか俺達は仲良くなれた。そして、次第に話題性も薄れて行き、今週に入ってからと云うもの、この話を蒸し返しているのは伊織ぐらいとなった。ただ俺の名は、瞬く間に学園中に広がっていったのだった……。

第一夜『プロローグ』（後書き）

感想やご意見がありましたらお気軽に♪

第二夜『兆候』（前書き）

これはペルソナ3の二次創作です。

第二夜『兆候』

そのまま三人で『2－F』まで他愛もない話をしながらやって来た。だが、教室の雰囲気がいつもと違っていた。

「ねー聞いた？ 隣のクラスで行方不明者が出たんだって」

「うわー怖え」

最近、学園はこの手の噂で持ち切りだ。だがそのいずれも、信憑性が高いのが不気味な所だ。事実、隣のクラスの生徒が行方不明になっていた事を、この後の朝のホームルームで知る事になったのだから。

「な～ゆかりっち？」

「うん、多分原因はアイツらだよ……」

昼休みの事だった。珍しく伊織と岳羽が真剣な顔付きで話をしていた。だがその内容が気になった。『アイツら』とは何を指すのだろうか……。

「珍しく神秘的な感じだな」

「ああ、如月くんか」

話し掛けてみたが、岳羽の表情は難しそうなままだった。

「もしかして、行方不明になったのって岳羽達の友達なのか？」

もしそれが当たっていたら、俺のこの質問はしない方が良かったのかもしれない。

「あっ、違う違う！　ただちょっと心当たりがあったから気になってただけだよ」

それを聞いて、少し安心した。

「あのー俺の心配は？？」

横で伊織が何かを言っているが、俺はあえてスルーしてみた。

「二人とも酷いっ！」

伊織は、か弱い乙女のような仕草をして見せるが、それすらも俺と岳羽はスルーして会話を続けた。

「心当たりってどう云う？」

「多分いなくなった子がイジメられてる所見ちゃったんだよね……」

岳羽の顔が再び曇ってしまった。ただ、その子がイジメられていたと云うのが本当ならば、今回の事に関係しているのかもしれない。

「まあでも、あまり気にしない方が良くんじゃないか？」

「一応先生には言ってみただけだね」

恐らく、本当に話を聞いただけだろう。全ての教師達を否定する訳では無いが、この手の話に対して、教師達はあまり関心が無いのが現実だ。

「だ・か・ら！ 俺を無視すんなああ！」

「なんだ伊織……居たのか」

白々しく言い放つと、伊織はポカーンとした顔を浮かべている。

「はぁ……悩むだけ無駄だよな」

岳羽はそう言い残してどこかへ行ってしまった。

「怒らせた、のか……？」

「ゆかりっちって、怒ると怖いよな」

俺達は、二人で顔を見合わせながら岳羽を見送ったのだった。

その夜、俺は何気なく寮を出ていた。空には大きな月が出ていた。まだ満月では無かったが、あと数日中には満月になるだろう。

「おい、こんな夜遅く出歩くんじゃない」

しばらく散歩をしていると、警官に呼び止められた。そこで初めて携帯で時刻を確認すると、あと数分で0時になろうとしていた。

――ガチャッ！

その時、時計の針が時を刻む音が聞こえたような気がした。すると次の瞬間、世界が一変した。辺り一面が緑がかった色に変色し、月が不気味な光を降り注いでいる。街の壁からは、血のような赤い液体が流れ出している箇所もある。

「な……?!」

ついさっきまで普通だった警官が、黒い棺の様なものになっている。そして良く回りを見回すと、同じ様な棺がそこかしこに立っていた……。

第二夜『兆候』（後書き）

感想などお気軽に♪

第三夜『影』

棺だらけの異様な光景に、恐怖と云うよりは、困惑の方が大きくなる。

「……なんだよ、コレ」

俺だけがこの異様な世界に取り込まれたのか、それとも世界の方が変わってしまったのか、どちらにせよ、これは異常な出来事であり、このままでは危険だ。

「グウウウウ！」

案の定、俺の目の前に『影』のような化け物が現れた。凝視するのを控えてしまう程の嫌悪感を抱くフォルム、顔には奇妙な仮面をしている。

「く、来るな……！」

徐々に縮まっていく距離に、思わず走り出していた。とにかく逃げる為に。俺の身体が直感的に動いていた。

「はあはあはあ………」

何故か少し走った程度で、極度の疲労感が俺を襲った。昔からサッカーをやっていたので、体力には自信があったはずなのだが。

「え?! ……如月くん？」

恐怖しか存在しない世界の中で、俺は聞き覚えのある声を耳にした。

「はぁはぁ……岳羽か？」

肩で息をしながら、俺は声の主を凝視した。すると、そこにいたのは岳羽だった。

「どうして象徴化しないの……？ まさか、貴方も適合者なの？」

「適合者……？」

岳羽が何を言っているのか理解出来ないが、とにかくこの場で動けるのは俺と岳羽だけらしい。

「んお?! 英二じゃん……何で？」

前言撤回、伊織も動けるらしい。そしてもう一人、同じクラスの『有里奏』がいた。

有里とは未だ面識は無いが、学園内でもかなり人気がある。容姿や性格が良いのもあるが、それ以上に不思議な魅力が彼女には備わっていると思った。

「有里もいたのか」

「うん、彼女も私たちと同じ適合者なの」

『適合者』またもその言葉が出てきた。

「なあ岳羽、適合って言うけど、俺は何に適合してるって言うんだ

？
」

「説明するのは簡単だけど……納得出来るか分からないよ？」

益々気になってしまいう反応だ。

「なら、説明だけでもしてくれるか？」

俺の言葉に反応したのは岳羽では無く、有里だった……と言うよりは、緊急な事らしかった。

「下がって！」

有里の身体が信じられない程の速度で俺の前へと移動して来た。後ろで束ねた髪が、ふわっと浮き上がり、元の位置へ戻った時、有里の前に『アイツ』が見えた。

「もう追い付かれたのかよ?!」

驚嘆する俺を除いて、他の三人は不自然な程に落ち着いていた。

――カチャッ

そんな時、有里は自らのこめかみに、銀色の銃の様な物を当てている。

「有里何やって……」

――バリィインッ！

制止させようとした瞬間、有里は銃の引き金を引いた。銃声は響かず、代わりにガラスが砕け散る様な音が響いた。

「な、なんだよコレ……」

そして、ガラスの割れた様な音の後に現れたのは、人の様な形をした『何か』だった。

「オルフェウス！」

有里の叫びに呼応して、オルフェウスと呼ばれた何かが、手に持つハーブを奏で出した。

――ボオオンッ！

次の瞬間、襲って来た影は足元から発生した炎に焼き尽くされた。それはまさに一瞬の出来事だったと言える。そんな光景を目の当たりにして、情けなくも俺は、驚嘆のあまり言葉を失っていた。

「驚かせてごめんね、大丈夫？」

有里が苦笑を浮かべて近づいて来た。さっきまでの凛々しい姿とは打って変わり、人懐っこそうな雰囲気醸し出している。

「あ、ああ……それより、今のは一体何なんだよ?!」

「ごめんね如月くん、今のは……」

「待ってくれ、それは私から話すべきだ」

岳羽が説明してくれようとした時、どこからともなく現れた紅い髪の女性がそれを静止させた。

「あ、先輩！」

岳羽は慌てて女性の方へと振り返る。『先輩』と云うからには年上なのだろうが、その見た目、声、醸し出すオーラは、大人の女性のそれと何だ変わりない様に思える。

「どうやら君にも影時間への耐性があるようだ」

この人が何を説明したいのか分からなかった。ただ、さっきも岳羽が俺に『適合者』かどうかを聞いてきた事を考えると、どうやらその『影時間』と云うものに対しての耐性なのだろう。

「少し考えてみたんですが、ここにいる全員がその影時間とやらの耐性のある適合者って考えれば良いんですね？」

「ああ、厳密に言えば少し違うのだが、そう考えてもらって構わない。ただ適合者と云うのは影時間の事とは少し違う」

先輩はどこか嘲笑気味な笑みをこぼしながら続けた。

「何の適合者かと云えば、君もさっき見たペルソナのなんだ」

『さっき見た』とは、有里が出したあの人型の何かであろう。つまり認めたくは無いが、俺にもあれが出す事が出来ると云うことになる。

「本当、ですか……？」

「……君が戸惑う気持ちも分かる。しかし、実際に今この瞬間、君は象徴化していない。それが何よりもの証拠だ」

『象徴化』恐らくはあの棺の様な物になってしまおうと言う事なのだろう。

「それじゃ……俺は間違いなくそのペルソナってのを使えるって事か」

「その可能性は限りなく高い。だが、影時間に耐性があるからと言ってペルソナを使えるかと言えば、実はそうでは無い」

イマイチ釈然としない答えに、少し焦れったさを感じはするが、多分先輩達にも良く分からない事なのだろう。

「取りあえずは、今後様子を見る為に私達が住んでいる分寮に来てもらおう」

「俺は別に異論ありませんが、大丈夫なんですか？」

寮の変更には色々と手続きなどもあるだろうし、それに何より引越代が馬鹿にならない……。

「ふふっ……心配はいらないさ」

「まさか先輩があゝの桐条グループの令嬢だったとは……」

「あっはっは♪ やっぱビックリするよな〜！ 俺も初めて聞いた時はビックリしたもんな〜」

金銭面の事は桐条先輩のお陰で解決でき、晴れて俺はここ『巖戸台分寮』へと引越して来たのだった。

第四夜『行方不明者』

朝、目が覚めるとそこにはまだ見慣れていない天井が広がっていた。

「まだ1日しか経ってないもんな……」

俺はそのまましばらく起き上がらずにぼーっと天井を眺め続けていると、部屋の外から声が聞こえて来た。

「おい、起きてるか？」

聞き慣れない男の声であった。多分この分寮に住んでいる『真田先輩』だろう。ここへ来た初日に顔を合わせた程度なので、まだどんな人かは良く分からない。

「はい、今開けます！」

俺は慌ててベッドから跳び起きて扉を開けた。するとそこには、何故か汗だくになっているジャージ姿の真田先輩がいた。

「昨日は良く眠れたか？」

「は、はい……」

いきなりの想定外の質問に、俺は面食らってしまった。

「そうか、中々の適応能力だな。まあそれはそうと、今日は一緒に学校へ行かないか？」

いきなりの質問に、いきなりの提案。見た目通りの行動派だというのが分かるが、いきなり過ぎる。

「ここから学校への行き方、まだ把握して無かったので助かります」
そう言うと真田先輩は爽やかな笑顔を浮かべた。

「そうか！　ならまた後でラウンジで会おう！」

そう言い残し、先輩は駆け足で自分の部屋へと戻って行った。

「嵐の様な人だな」

それが俺のあの人への第一印象だった。

着替えと食事を済ませた俺は、ラウンジに設置してあるソファに座りながら真田先輩を待った。

「お、早いな」

ニュースで芸能の話題を見ていると、真田先輩がやって来た。改めてみるとかなりの好青年と云う感じであり、かなりモテるだろうな、と思った。

「ん？　有里も一緒に行くのか？」

「うん、真田先輩に誘われちゃってね」

有里は少し眠たそうな顔をしている。昨日夜更かしでもしたのだからか……。

「俺と一緒に行くのは嫌なのか？」

真田先輩が冗談混じりに有里に聞くと、有里は間髪入れずに言い放った。

「だって朝早くに起こしにくるんだもん」

その刹那、俺達を取り巻く空気が凍り付いた。

「ま、まあ遅刻するといけないんで、行きましょう先輩！」

「あ、ああ……」

俺は先輩と有里を引っ張る様に寮を出た。有里の意外な天然ぶりに驚いた。

分寮から結構な距離を歩いた所にモノレールの駅があるのだが、俺達は駅行くその間、一言も会話がないまま歩くのだった。

「……気まずい」

そして、そのままモノレールへと乗り込んだ所で、ようやく先輩が口を開いた。

「すまないな如月、もう立ち直ったよ……もう大丈夫だ」

言葉とは裏腹に声が震えていますよ、先輩。

「あははは……あ、そうだ！ 先輩はどうして今日誘ってくれたんですか？」

「そうだな、危うく忘れるところだった」

有里の一言にどれだけショック受けてたんですか、先輩……。

「もう知っているよな、俺達が何と戦っているか」

「はい、シャドウと呼ばれてる奴らですよね？」

車内だと云うこともあり、あまり大きな声では話せない内容なので自然と小声になってしまう。

「そうだ。そして奴らと戦う時に指揮をとっているのが有里だ」

「有里が、リーダー？」

そう言っ有里の方を向くと、有里は『えっへん！』と胸を張って見せた。その可愛いらしい仕草に少し見とれてしまった。

「て言っても、実際に戦ってる時は桐条先輩がサポートしてくれるんだけどね」

苦笑を浮かべながら有里は言った。確かに戦っている時は目の前の敵に集中する為、周りまでちゃんと見れないだろう。

「そんな事は無い、お前はよくやってくれてるさ」

真田先輩は優しい笑顔をしている。その表情から、本当に有里がリーダーを上手くこなしているのが分かる。

「もおゝ先輩ったらあ！ 褒めてもアメちゃんしか出ませんよ？」

照れ隠しか本気かは分からないが、有里は少しふざけた喋り方になり、本当に制服のポケットからアメちゃんを取り出した。

「いや、甘いものは苦手なんだ」

真田先輩は冷静に断ったが、そこはボケるところだと思います。案の定、有里は行き場に困った飴を手にも固まっている。

「何だかな……」

俺はそう呟いて有里の手の平から飴を取り、それを舐めた。が、全然甘くなど無かった。それどころか、磯の香りがしてくる。

「な、何味だよコレ?!」

「昆布飴だよ!」

有里は『グッ』と親指を立てて、こっちに向かって突き出して来た。有里の天然ぶりには舌を巻く。色々な意味で……。

それから俺達はそんなどうでも良いようなやり取りを交わしながら

学校へとたどり着いたのだった。

「あれ？ 如月くん、今日は珍しく奏と来たんだ〜」

有里と共に教室へ入ると、岳羽が声を掛けて来た。何故か少しニヤニヤしているのは気のせいだろうか……。

「もうゆかりちゃん、そんな艶っぽい事なんて何も無いよ〜」

有里の言い回しがいちいちオバさん臭いのは何故だろう。

「奏、言い方がオバさんっぽいよ……」

岳羽も同じ感想を持ったらしい。

「あははは、ちょい古かったかな？」

無邪気な笑顔で返す有里。やはり有里は不思議な魅力を持っているのと同時に、無邪気な心を持っているのだと分かった。もしくはそれが『不思議な魅力』なのかもしれない。

「朝から楽しそうじゃん♪ 俺っちも混ぜてくれよ!」

そこへ、いつもの事ながら伊織が参戦してきた。

「今日は珍しく早いんだな、伊織」

いつもの伊織は遅刻ぎりぎりに来るのだが、今日は珍しく教室にいたらしい。

「あのなあ、俺だってたまには早く来るんだよ」

「何偉そうに言ってるのよ順平、今日は先輩に呼ばれて渋々来たくせに」

そんな事だろうとは思ったが、少しでも褒め讃えようとした俺の行き場の無い感情を拭えずにいた。

「あ、そう言えば……失踪事件の事なんだけどね」

これまでの雰囲気とは違い、神妙な面持ちで岳羽が切り出して来た。

「そういや俺も聞いたぜ、隣のクラスの奴が噂してんのをさ」

どうやら行方不明者が出ているのは、この学園内ではかなり有名な話になっているようだ。

「これも、影時間が関係しているのか？」

この面々が気にしているのだから、少なくとも何だかの関係はしているはずだろう。

「多分、ね」

岳羽は苦笑しつつ言ったが、その気持ちは何と無くだが分かった。

「もしくは、その行方不明者はペルソナ使いだったとかは？」

かと思えば、今度は有里はいきなりとんでもないことを言い出した。だが、その場合も考えられないことかもしれない。シャドーに

関係があるとしたら、その可能性はかなり高い。

「そうだとしたら、最悪だよね」

「ん？ どうしてだよ、ゆかりっち」

確かに岳羽の言う通り、行方不明者がペルソナ使いだとしたら、貴重な戦力になりうる人材を無くした事になる。

「もう、これだから馬鹿な奴は面倒なんだよ……」

「酷い!？」

伊織は、すつとんきょうな声を上げながら両手で顔を塞いだ。そしてそのまま泣きマネへと移行するが、例の如く皆で放置していた。

昼休み。教室の一角では、伊織の漫談コーナーが設けられていた。伊織が普段つるんでいる、仲の良いメンバーが観客である。

「でさでさ、そのゲームをゆかりっちがさ……」

他愛のない話を熱弁する伊織。そしてまたある一角では、岳羽達が弁当をつつきながらガールズトークで盛り上がりを見せている。これまたよくある日常の風景である。

「有里さん、お弁当食べよ」

有里の部活仲間である『岩崎理緒』が有里を誘いに来た。最近一緒

にいる所をよく見かける。

「今行こうとした所だったんだ♪」

有里の交友関係には驚かされる。男女問わず、かなり広い事に。それにも有里の人徳なのだろう。

「ねえ、如月くん。今ちょっと大丈夫？」

皆の様子を眺めていると、クラスの女の子が声を掛けて来た。

「ああ、大丈夫だけど……何か？」

「如月くんて、あの分寮に住んでるんでしょう？」

『あの分寮』とは、巖戸台分寮の事だろう。誰かに言った訳でもないのに、こうして噂が自然に広まってしまいう辺りが、この学園の怖いところである。

「住んでるよ」

「やっぱりそうなんだ！　じゃあさ、三年の真田先輩って分かるよね？　寮で会ったりしてるんでしょ？　普段の先輩ってどんな感じなの？」

どうやら真田先輩のファンらしく、俺はこの後も昼休み中、質問責めにあった。そして俺は、初めて真田先輩の人気を恨んだのだった。

番外編『有里奏くHappyDays』（前書き）

今回の話は有里奏の視点で書かれた日常を書いてあります。

番外編『有里奏くHappy Days』

昼間は普通の学生、夜はシャドーと戦うスーパー高校生。

「なんかカッコイイよね、私たち♪」

「え、いきなりどうしたの？」

ゆかりちゃんがびっくりした顔をしている。

「ごめんごめん、また主語を忘れてたよこりゃ失敬♪」

何と無くおどけてみた。私はよく主語を忘れてしまう事があり、皆を困らせてしまう。自覚はしてる、してるけどまた繰り返してしまう。

「もう、奏は天然過ぎるよお」

天然とは失礼な！……と言いたいけど、自分は天然ではないと言いつつ返したら、そのまま泥沼にはまりそうなので我慢する。

「そうなんだよね、私結構癖強くてさく昔から天パ天パってよくいじめられたなあ」

「……そう言う所が天然なんだよ」

墓穴を掘ってしまった。それにしても、ゆかりちゃんは相変わらずツツコミが厳しい。

「私たちコンビ組んでお笑いでテッペン目指さない？」

「なんでやねんっ」

ゆかりちゃんはノリよくツッコんでくれた。しかも手の動作入りで。そう言った所がゆかりちゃんの良いところだと思う。

「ノリ良いねえ♪」

「ふふ、やっぱり奏と居ると飽きないね♪ 今日はこのまま私の部屋に居なよ？ それでさ、朝まで話そう！」

「その話し、乗った！」

私たちは互いにハイタッチを交わした。

次の日、私とゆかりちゃんは本当に朝まで話して過ごし、見事なまでの寝不足に陥っていた。

「おはよー順平」

「どうしたんだよ二人とも?! 酷い顔だぞ？」

さっき鏡で見たけど、自分でも酷いと思った。けど、ゆかりちゃんとうこうして寝不足になるのはよくある事なので、最近ではもう慣れて来た。だから、見た目以上に疲労感もましてや辛さもない。

「昨日は二人でハッスルし過ぎちゃってねえ」

「もお、変な言い方はやめてよね……二人で朝まで話してただけよ」

「何だよ、女の子二人のイケない交遊録でもしてたのかと思ったぜ」

順平の今の言い回しには、さすがの私も舌を巻いた。中々やるな、順平。

「それよりさ、今日タルタロス行かねえ？ 最近行ってなかったじやん？」

順平に言われて気が付いたけど、確かに最近は色々あって、タルタロスに行っていなかった。

「それは私たちに死ねって言ってるのかしら？ 順平くん？」

ゆかりちゃんが怖い。現に、順平も震えている。

「まあまあそう言わず、今日は頑張ろうよ？」

「……もお、奏がそう言ったら断れないじゃん」

口ではそう言ってるけど、ゆかりちゃんの顔は笑っていた。何だかそれが、とてもゆかりちゃんらしくて、私まで笑顔になった。

「おはよ、奏」

教室の前まで来た時、同じ部活の仲間である理緒に声をかけられた。

理緒はテニス部一の真面目な子で、それが原因で部内で少しだけ浮いている様に見える。

「おはよー理緒♪」

軽く挨拶を交わして互いの教室へ入る。すると、最初に顔を合わせたのは『如月英二』だった。

「有里、だよね？ おはよう」

「うん、おはよ！」

転校して来てからもう一週間以上経ったのもあり、すっかりこの学校には慣れたみたいで安心した。

「この問題が分かる人はー？」

英語の授業中。鳥海先生が人生の愚痴をこぼしながら授業を進める。そして、決まって誰も答えようとしない問題には順平が指名される。

「じゃあ……有里さん、この問題分かるかしら？」

油断している時に限って当てられる。

「あ、アイムノットスピークイングリッシュ！」

私のカタコトの英語、そしてその解答に、教室が笑いに包まれる。正直、英語は苦手中の苦手です。そして私は頭が悪い。自覚出来る

程に……。

「いいぞー有里」

「さすが奏ー」

よく分からない歓声が聞こえてくるのは気のせいだろうか？

放課後。何時もの通りに所属しているテニス部に出ていた。

「皆、もっと真面目にやろうよ」

「あんた堅物過ぎ……」

そう言って今日も、理緒は他の部員達と対立してしまっている。

「はぁ、もうウザいから今日は帰るわ」

部員の一人が帰りだすと、次から次へと他の人達も帰ってしまう。ついには、私と理緒の二人になってしまった。

「ごめんね、私に構わないで奏も今日はもう帰って良いからね……」

今にも泣き出しそうな理緒の姿に、私はいたたまれなくなり、理緒の手をギュッと強く握った。

「私は理緒と居るよ！」

精一杯に力強く言い放った。そうでもしないと、今の理緒に届かないと思ったから。

「ありがとう、奏」

理緒はようやく笑顔を見せてくれた。

「ほら、理緒は笑っている方が良いよ♪」

絶対にいつか、理緒達が和解出来る日は来ると思う。いや、絶対に和解して欲しい。

「奏、帰りにどこか寄ってこ？」

「うん♪」

練習の後、二人で近くのハンバーガーショップに寄った。そこには、部活を帰ってしまった子達が溜まっていた。

「あっ」

一番に帰ると言い出した子と目が合ってしまった。

「奏、行こう」

理緒が焦って店を出ようとした。けど、それを止めたのは意外な事に、その子だった。

「岩崎、待って！」

理緒の手を掴んで引き止めた子は『栗原優子』理緒とは幼なじみだったらしい。

「優子……」

「あのさ、その、さっきは……ごめん」

優子は本当に申し訳なさそうに謝った。理緒は驚いた様子でしばらく固まっていた。けれど、次第に両目から涙が溢れ出して来た。

「ううん、私こそ」

二人のやり取りを見ていて気付いてしまったのだけど、理緒は少し真面目過ぎてしまったんだろうと思う。きっと理緒は、優子に比べて友達と楽しく過ごす事が下手だったんだろう。だから練習中に友達と楽しそうに話していた優子に対して、嫉妬していたんだろう。

「ほら理緒、皆のところに行こう♪」

私が背を押してあげると、ためらう理緒を優子が手を引いて皆の居る席へと連れて行ってくれた。それからもう楽しかった。皆ともちゃんと和解出来たし、理緒も意地を張らなくて良くなり、何よりも理緒の恋の話を聞く事が出来た。

「え、理緒って友近の事好きだったの?!」

優子が凄く驚いている。正直なところ、私もかなり驚いている。

「す、好きって言うか……何か友近が他の子と仲良く話してるのを見ると、胸が苦しくなって」

「それを恋って言うんだよ！ 友近にフォーリンラブだよ、理緒！」
つい私が興奮してしまった。

そんなこんなで、テニス部の校外活動はとても素敵な形で幕を閉じたのだった。

「ただいま♪」

上機嫌で寮に戻って来た私を向かい入れたのは、桐条先輩だった。

「ずいぶんと機嫌が良さそうじゃないか。何か良い事でもあったのか？」

「はい、とっても良い事があったんですよ！」

私がそう答えると、桐条先輩は微笑みながら高そうな感じのチョコレートくれた。

「今の君にこそ、このチョコレートが合うだろうな」

「あ、ありがとうございます！」

私は有り難く受け取り、早速食べてみた。すると、口いっぱい幸せな甘みが広がった。

「はわわゝ幸せえゝ♪」

全身がとろけてしまう程の美味しさだった。例えるのならば、まさに天にも昇る味。その言葉しか浮かばない。

「ふふ、やはり君にあげて正解だったみたいだな」

そう言うと、桐条先輩は上へ上がって行ってしまったので、私もこの幸せモード全開のまま自室へと戻って行った。

「ふわあゝ」

タルタロスの探索が終わり、シャワーを浴び終えた私は、再び自分の部屋に居た。今にも寝てしまいたいと言う衝動に、私は抵抗する間もなく夢の中へ落ちて行った。

こうして私のごく普通な、最高に幸せな一日は終わっていった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8071n/>

ペルソナ3-if

2011年10月7日03時15分発行